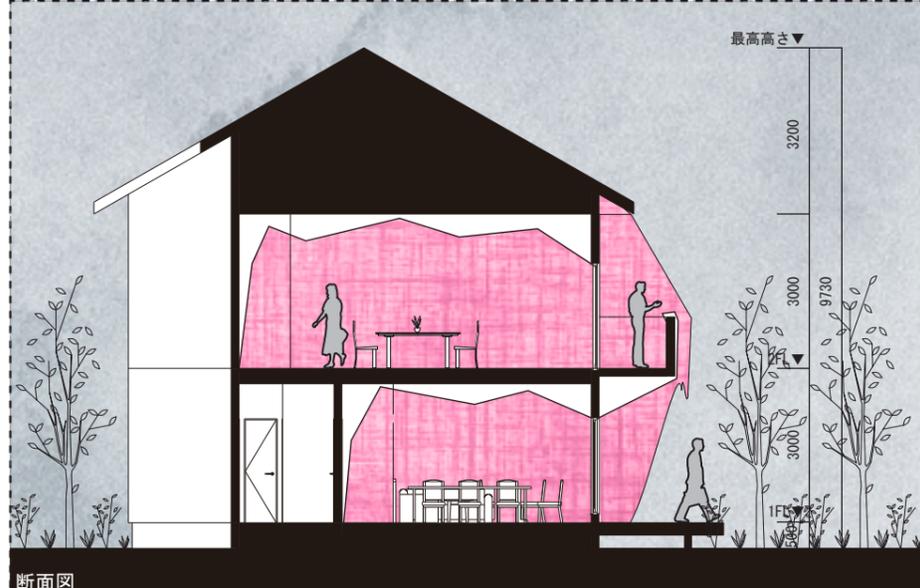


WRAPPING CITY

「まちに布をかける」
- 空き家・空き店舗活用のモデルケースとして -



設計主旨：私がこの街を訪れて初めに感じたことは、街から個性が感じられなく無機質で、そして街中に人が歩いていないことだった。この理由は、木造密集市街地再編の為に、中心市街地が一度塗り替えられ、土地から文脈が消えてしまったことに起因しているのと推察した。綺麗すぎる水に魚は住まない。そんな街には空き家や空地が増え、ますます街並みから人の生活感が失われていく。一方で、伊勢崎市は古代より養蚕の一大産地であり、伊勢崎銘仙は伝統工芸品として高い評価を受けている。この伊勢崎銘仙でまちの課題である空き家にアプローチできないだろうか。一枚の布で、空き家を包んでみる。一部は包み、一部は包まない。すると「布 - 空き家」の関係は、「スクリーン - 被写体」のような関係に置き換わる。すると、それまで隠れていた生活の痕跡や暮らしの跡が浮かび上がる。また、布がつくる半屋外空間は人々の小さな居場所となり、布そのものも人々の生活を形作る。「スクリーン - 被写体」という関係は「布 - 街並み」にも拡張してゆく。無機質な街並みに、布という異物をぶつける。すると現在の街並みの中に隠れていた生活や歴史の様相を浮かび上がらせ、生活感を増幅させる。また、布がつくる小さな居場所が連続し、街並みをより有機的なものにして行く。布が街のなかで目立つのではない。布は街のスクリーンとなって、街の生活感を引き立てる。



断面図



内観パース。内外を連続して布に包まれた空間が広がる。

1. 希釈された土地の文脈 2. 伊勢崎に今あるもの 3. 伊勢崎銘仙と空き家問題を結びつける 4. 平面図（一般的な住宅をカフェに再利用）

■木造密集市街地の再編

伊勢崎駅周辺の中心市街地は、戦争での空襲や台風を受け、高度経済成長期に街並みが変化した歴史がある。加えて、現在では昭和にできた街並みも、防災性の観点から土地区画整理事業によって再編されつつある。

■無機質な生活感の無い街並み

戦前、戦後、現在において街並みが一新され続けてきた伊勢崎市。街は過渡期であり、多くの土地が更地になり、新しくなっている。その結果、街の歴史や生活の、履歴や痕跡が薄まり、街並みが無機質に感じさせることは一つ課題であると考えられる。私は、この街に対して、新しく綺麗ではあるが、どこか無気力な印象を抱いてしまった。

■伊勢崎銘仙

伊勢崎市は古代から養蚕地帯として栄えてきた。特に江戸 - 昭和までは日本における養蚕の中心地の一つとして栄えた。時代の流れで和装から洋装が主流となる中でも、織物業組合（織物協同組合）主導のもと新技術の開発や後継者問題に取り組み、その活動の功績から伝統工芸品として高い評価を受けている。

■点在する空き屋・空き屋バンク

伊勢崎市には空き店舗・空地が多数点在している。このような状況を受け、市は空き家バンクという制度を行っており、誰でも空き家の物件情報にアクセスできる。一方で、入居者がきまるまでは完全な空き家になっていることは課題であり、入居者が決まるまでの穴埋めになる提案やその延長で入居者が決まるような提案ができないだろうか。

■空き家と布の対比で、隠れていた生活感が浮き上がる

「布 - 空き家」の対比関係は、時に「スクリーン - 被写体」のような関係性になる

空き家に布という異質な存在でつつんでみる。すると「布 - 空き家」には対比関係が生まれる。そのような関係性は、別の言い方をすると、「スクリーン - 被写体」のような関係に置き換えることができると言える。すると、それまで隠れていた生活の痕跡や暮らしの跡が浮かび上がってくる。無機質な街並みに、さらに無機質な存在を対比させることで、結果、街並みに生活感を取り戻せるのではないかと考えた。

■空き家再生のプロセス

①チャレンジショップ、イベントなど 一時的な利用 ②町に定着、常設化、1Fへの拡張 ③建物全体への拡張、空き家の再生

空き家・空き店舗の段階的な利用法として、①建物外を利用し、チャレンジショップ・イベントなどの短期的な利用、②建物外+1Fの常設での一体利用、③建物全体の利用、というステージごとに利用を拡大していく方法を提案する。イニシャルコストも小さく、フィードバックも得ながら事業を進めることができる。



① 空き家・空き地を利用したカフェレストラン

■ 空き家&空地の一体利用で魅力的な半屋外空間を

空地と空き家の一体利用を考える。空き家にはカフェやレストランなどの飲食店が入り、布は空き地をそれら店舗のテラスに変える。テラスは公園のように一般開放し、商店街を利用する人々のたまり場として機能する。魅力的な屋外空間を不随させることで、空き家の付加価値を高めることができるのではないかな。



② 布の庇でまちにひらくコワーキングスペース

■ 庇のあるワークプレイス

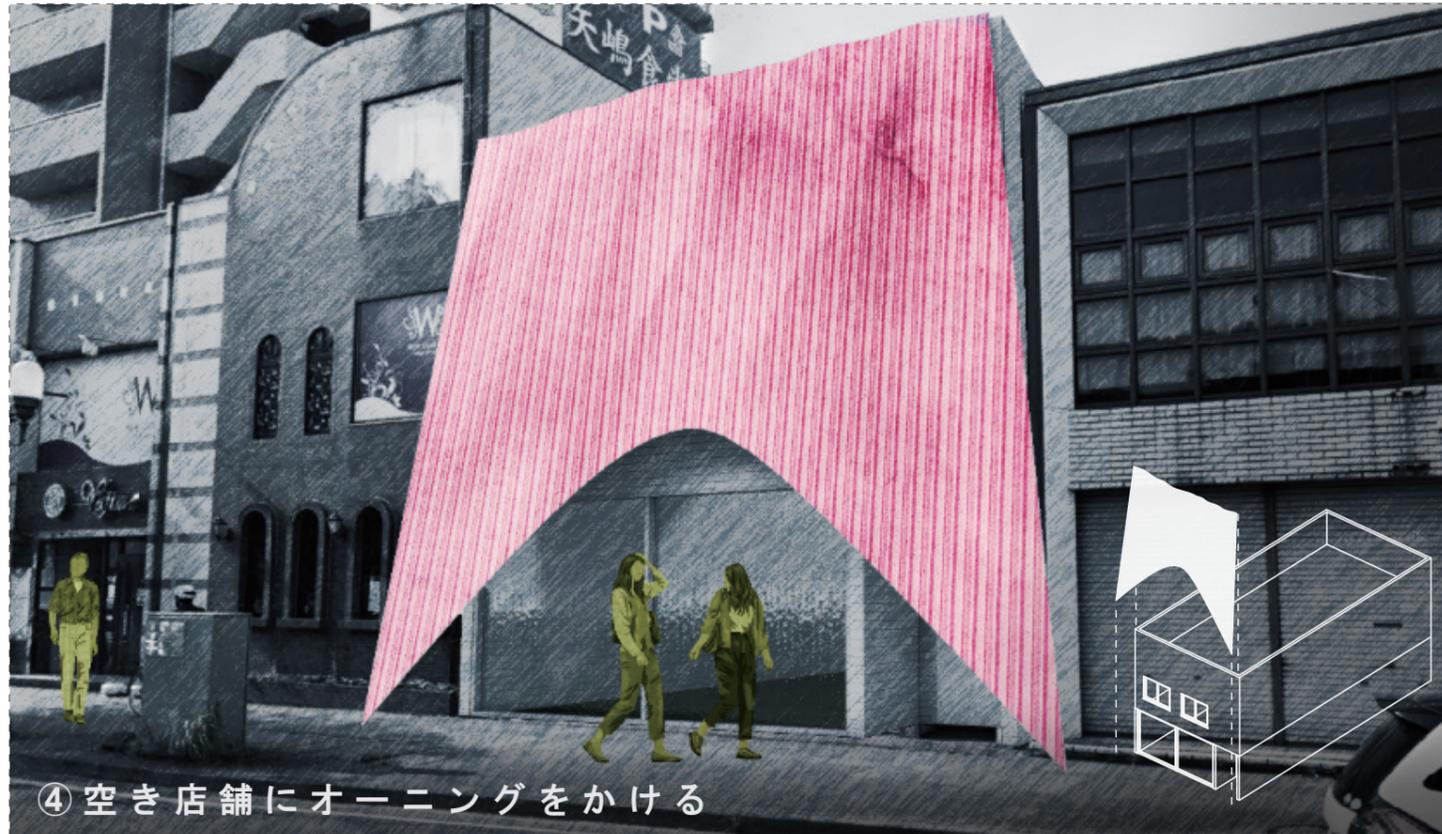
敷地は現在空きビルになっている旧第一生命ビル伊勢崎分室を対象とした。銀行の閉じられた印象を一新する、庇としての布をかけ、まちにひらいたコワーキングスペースとしての使い方を提案する。この場所に元からいるだけの事業者だけでなく、リターンなど、外部から来る若手なども対象とし、若手も老舗も集まってくるような施設として提案する。



③ 角地にあるショーウィンドウはまちの日陰に

■ 商品をゆっくり眺める為の小さな場・ショーウィンドウの演出として

商店街の角地にある空きテナントを敷地として提案する。元は服屋などのテナントだったのであろうか。角地に大きく面した、ガラス張りが特徴的な建物だ。そこで、このショーウィンドウの演出として、そしてまちの日陰として、商品ゆっくり眺めることができる。このような小さな場を商店街に足していくことが、にぎわいにつながるのではないかな。



④ 空き店舗にオーニングをかける

■ 店舗に人を呼び込むオーニング

商店街沿いにある、空き店舗になっている建物を対象として提案する。この街でよく空き家になっているタイプの建物の一つで、絶壁になっていて、どこか寄り付きにくい印象を持つ。そこで、オーニングとして布をかけることで、お客さんがお店の前で少し立ち止まることができる場が生まれる。このような場が連なっていくことで、より魅力的な街並みになるのではないかな。